

弁護士という職業柄、マスコミの方々との付き合いは多い方だと思います。裁判担当の司法記者とのやりとりが中心でしょうか。

著者もNHKの記者でした。大阪放送局の司法担当キャップとして、国有地の売買などを巡る森友学園問題取材し、スクープ記事を書いた後、NHKに限界を感じ退社したのです。

ノンフィクション本で、内容の多くは森友学園問題に絡んだ社内内部事情を記しているのですが、タイトルと中身はちょっとギャップがあると思います。

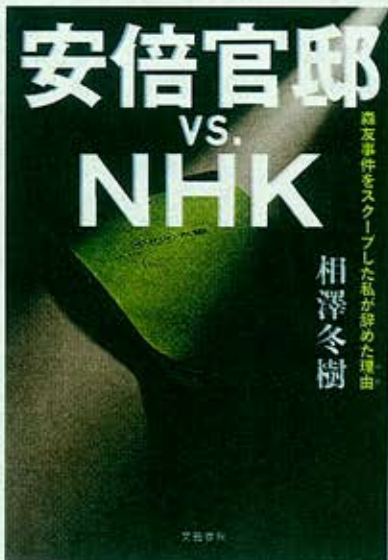
著者は近畿財務局が森友学園に国有地を売却するに当たり、事前に学園側に出せる金額の上限額を聞き出したというニュースをつかみます。しかし、放送後には、著者の当時の上司に、NHKの上層部から電話がかかり「あなたの将来はないと思え」と激怒されたといえます。財務省が土地の値引きの根拠としたごみの処理を巡り、森友学園側に口裏合わせを求めていたという特ダネも、ニュース番組では最後の項目扱いになったそうです。

上層部は何に付度しているのでしょうか。著者も報道側の付度、上層部からの圧力を主張します。森友学園問題の真相究明は司法の



近刊私の1冊

読書三昧



場に移っていますが、結局中途半端に終わったことは皆さんご存じの通りです。読者として改めて感じたのは、NHKという公共放送が持つ役割です。国民が知るべきニュースをどう報じたのか、国民の知る権利を妨げるようなことはなかったのか。視聴者の一人として、しっかりと検証していく必要があるように思いました。

ところで、記者はどのように情報をつかみ、その情報をどのようにニュースに仕立てているのでしょうか。その過程が克明に描かれているのも、この本の魅力の一つです。

著者はある情報を基に、事実かどうかを本人に確認に行きます。朝の出勤時間、目的の相手が家から出てきます。何気ない会話から始め、次第に本題へと話を進めていく様子は、

安倍官邸 vs. NHK

相澤冬樹著

(文藝春秋、1500円・税別)

まるで映画のワンシーンを見ているようでした。

いきなり会っても話を聞き出せるわけがありません。絶対認めるはずのない相手に認めてもらうにはどうするか。答えは、相手の立場になることだそうです。相手はどう感じているのか、どう考えているのか、どういう話ならするのか。そのために出身地や経歴、趣味、性格といったプロフィールまで事前に調べると述べています。

私自身にも似た部分があります。弁護を引き受ける事案も千差万別、裁判でのアプローチはそれぞれ異なります。本人や相手方の属性、年齢、家族構成などを知り、どう対応していったらいいかを見極める材料にするのです。

ニュースになるまでこれほど丁寧に取材していくのか、改めて記者という仕事の大変さを感じると同時に、素晴らしい職業だと思いました。報道機関は行政、立法、司法に次ぐ第四の権力と表現する人もいます。記者の人たちには誇りと責任を持って、頑張ってもらいたいと思います。少なくとも「裏」も取らずネット情報に頼って誤報を出すようなことはないと思いたいものです。(談) 聞き手・井上光悦

「公共放送内に付度」主張

「読書三昧」は水田美由紀さんから5人が交代でお薦めの本を紹介、毎週火曜日に掲載します。

みずた・みゆき 倉敷市出身。岡山大学法学部卒。1991年、岡山弁護士会入会。96年4月、水田法律事務所(現鳥城総合法律事務所)開設。2016年4月から1年間、岡山弁護士会長として活躍した。現在、岡山市ふれあい公社副理事長を務め、高齢者問題にも関心を持つ。高校生の時に読み、主人公に魅了されたアガサ・クリスティの推理小説「ミス・マープル」が、弁護士を志すきっかけの一つになった。